

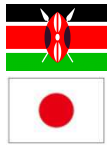


北部ケニア干ばつレジリエンス通信

The Project for Enhancing Community Resilience Against Drought In Northern Kenya
(JICA ECoRAD Project)

北部ケニア干ばつレジリエンス向上のための総合開発及び緊急支援計画策定プロジェクト

生計多様化特別号 2013年1月



2012年2月に開始された本プロジェクトは現在第2フェーズを実施中で、マルサビット県において、主に「持続可能な自然資源管理」、「家畜バリューチェーンの改善」、「生計多様化」プログラムが進行中です。本号では、これらプログラムのうち、生計多様化プログラムについてご紹介します。

生計多様化プログラムの背景と目的

近年、干ばつやその他要因（放牧地の農地への転向や部族間の争いなど）により水や牧草へのアクセスが困難になってきており、牧畜民は以前よりも遠方まで放牧に行かなければならなくなった結果、男性のみが放牧を行い、女性や老人・子供は水源や学校など比較的社会的インフラが整備された場所に定住する傾向にあります（半定住）。しかし、多くの場合、半定住地に残される家畜数は限られていて、後者の多くは生計維持が困難な状況にあり、また累次の干ばつで家畜を失い、牧畜からドロップアウトして河川沿いや町の周辺に定住し、食糧援助に依存している牧畜民もいることから、こうした半定住・定住コミュニティにおける生計多様化の可能性を検討することが、本プロジェクトの課題となっています。

北部地域での典型的な家（カラチャ）



従って本プログラムではプロジェクトの目的も踏まえ、(半)定住民の干ばつ被害に対するレジリエンスを高める為に、プロジェクト対象地区住民の生計を多様化させ、リスクヘッジの手段を持たせる為のモデル（同様の他地域へ適用可能な、ある程度の汎用性を持つ普及効果の高いモデルを想定）を作ること、を目的とした事業を、当地のパートナーNGOとともに進めています。

生計多様化プログラムの検討

プロジェクトでは、自然資源管理プログラムにおける水資源ポテンシャル調査や牧草資源ポテンシャル評価等の結果に基づき9つのパイロット事業実施地区を選定しています。また、これら選定された地区においては、プロジェクトの活動として、CMDRR (Community Managed Disaster Risk Reduction) における参加型災害リスク評価と計画立案が行われ、干ばつ被害軽減、生計多様化の為の意見がコミュニティ住民から出されています。生計多様化プログラムのパイロット事業対象地選定については、他プログラムにおけるパイロット事業とのバランスも考慮しつつ、事業対象地区における地域特性、またCMDRRで出されたコミュニティの意見も踏まえ以下の案としました。

Region	パイロット事業対象地区	選定地区と想定される生計多様化事業内容
North 乾燥し遼闊地であり、条件不利地域	Turbi	-
	Kalacha	塩事業（近隣に塩生産が可能な砂漠あり）
	Hurri Hills	-
Central マルサビット周辺、標高高く降雨あり、またインフラ等経済社会条件よい	Dirib Gombo	-
	Dakabaricha/ Jirime	養鶏事業（町に近い）
	Gar Qarsa	ヤギ事業（生計は家畜依存）
South 雨季は一定程度降雨あり、またその中でも南部はイシオロやサンプルに接し経済活動におけるポテンシャルあり	Korr	-
	Arapal	ヤギ事業（遼闊地）
	Neurnit	ガム・レイシン and/or 蜂蜜事業（後背地に森林があり資源が豊富）

プロジェクトでは第3フェーズにてガイドラインを作成することになっており、そこでマルサビットにおける「生計多様化」のモデル導出を行う予定であることを念頭に、上記事業は、JICA's ECoRAD Approachとして家畜利用型（養鶏、ヤギ事業）、地域資源利用型（塩、ガム・レイシン and/or 蜂蜜事業）として以下を主な考え方として取り纏めることを想定しています。

グループアプローチ：将来予想される干ばつによるダメージからの回復を、グループとして行う。

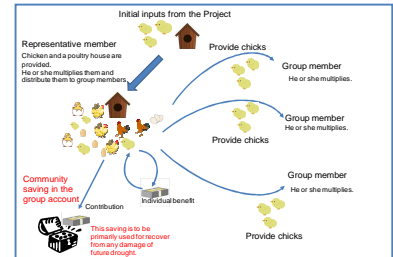
活動内容：家畜または地域資源を活用した活動。家畜はグループで共有しつつ増殖させ各メンバーへ配布、グループの資産増とそこから得られる個別メンバーの便益享受。地域資源は、グループで資源を活用し販売を通じた現金収入活動。

貯蓄による備え：上記活動を通じ、グループに干ばつ時に活用する目的で貯蓄を義務付ける（VICOPA<Village Community Bank>の要素。この際地域の経済状況に鑑みメンバーへの貸付は強調しない）。

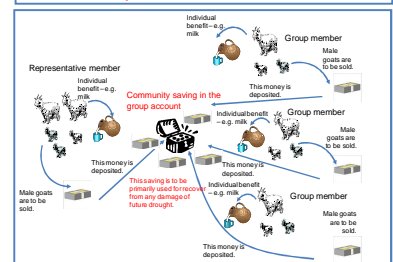
つまり、パイロット事業実施を通じ、グループによる新たな生計多様化活動を通じ、通常時にはそこからの便益も享受しつつ、活動を通じてグループで平時に貯蓄した金額を、干ばつが起こり被害を受けた場合、被害からの回復に活用し、干ばつ後に同様の活動を再び開始できるように持続可能なシステムの確立を目指したいと考えています。

代表的なパイロット事業の概要

たとえば養鶏事業（"JICA's Chicken Merry-Go-Round System"と命名）ですが、商業生産ではなく一般家庭で実施するレベルの養鶏で、グループの代表者に鶏を供与、数を増加させ、適宜グループメンバーに提供します。代表者は、数を増加させつつ、卵、雛や成鳥の販売に係る便益の一部をグループ用の貯蓄とし、これは、干ばつ時に初期鶏数の購入に用途を限る形で、同養鶏事業の初期投資額を最低額として貯蓄を継続させるものです。



同様にヤギ事業（こちらも名前は "JICA's Goat Merry-Go-Round System"）では、グループの代表者に雌ヤギを供与、数を増加させ、雌ヤギが産まれたら適宜グループメンバーに一頭ずつ提供します。代表者（継続してメンバーも）は、牡ヤギが産まれたら売却し、売上をグループ用の貯蓄とし、これを干ばつ時に用途を限る形で、同ヤギ事業の初期投資額（初期に必要なヤギ数の購入）を最低額として貯蓄を継続させ、干ばつ時に備えるものです。



今後の予定

今後パートナーNGOが中心となり、コミュニティを巻き込み想定事業内容の説明、合意形成と対象グループの選定、詳細ルールのグループ自身による決定など、参加型の計画立案を実施し要すれば修正など施した上で、コミュニティが詳細を了解し同意した上で事業を実施する予定としています。これらパイロット事業は、第3フェーズに少し重なる形で2014年後半までモニタリングを継続していきます。



コミュニティとの参加型計画立案（説明会の様子）

これまで同地域では、干ばつが発生した際に「緊急援助」や「人道援助」として家畜や食料配布型の支援が多く行われ、コミュニティ住民も少なからずドナーからの支援に依存する傾向も見られます。本プロジェクトでは「開発援助」として、同事業の実施を通じコミュニティのキャパシティ強化を図るとともに、レジリエンス向上のためのグループアプローチ（日本の支援ならではの「コミュニティ防災」）や将来の干ばつ被害に備え平時から準備することの重要性に係る学び等を促していきたいと、日々試行錯誤しながら活動を行っています。